ピース・ウイング長崎 会報

へいわ

123号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町７番８号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)844-9961
http://www.peace-wing-n.or.jp

平和写真コンテスト　作品大募集中！

■被爆64周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典と８月９日関連行事 ■長崎平和宣言
■アジア青年平和交流事業と海外原爆展 ■ピースネット ■TOPICS

被爆体験講話を行う
継承部会・渡邉司さん

現地の学生と議論する
日本から参加した青年たち

８月にマラヤ大学（マレーシア）にてアジア青年平和交流事業と海外原爆展を合同開催しました。

平和の祈り 長崎から世界へ

継承部会員でもある奥村アヤ子さんが被爆者代表として平和への誓いを読み上げました。

8月9日

被爆64周年

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

追悼平和祈念館の交流ラウンジでも式典のようすを放映しました。

8月4日～10日

原爆写真展「音の消えた街」

写真資料調査部会が追悼平和祈念館や平和市長会議が開催された長崎ブリックホールで原爆写真展を実施しました。

8月8日

平和の灯キャンドルライトアップコンサート

協会職員もキャンドル作りや会場運営のスタッフとして参加しました。

ほかにも8月10日には追悼平和祈念館で在外被爆者の体験講話収集を通じて被爆体験の継承問題を語るドキュメンタリー映画「ヒロシマ・ナガサキダウンロード」（監督：竹田信平氏）の上映会が開催されました。

一部の写真は長崎市広報広聴課提供

長崎平和宣言

今、私たち人間の前にはふたつの道があります。

ひとつは、「核兵器のない世界」への道であり、もうひとつは、64年前の広島と長崎の破壊をくりかえす滅亡の道です。

今年４月、チェコのプラハで、アメリカのバラク・オバマ大統領が「核兵器のない世界」を目指すと明言しました。ロシアと戦略兵器削減条約（START）の交渉を再開し、空も、海も、地下も、宇宙空間でも、核実験をすべて禁止する「包括的核実験禁止条約」（CTBT）の批准を進め、核兵器に必要な高濃縮ウランやプルトニウムの生産を禁止する条約の締結に努めるなど、具体的な道筋を示したのです。「核兵器を使用した唯一の核保有国として行動する道義的な責任がある」という強い決意に、被爆地でも感動がひろがりました。

核超大国アメリカが、核兵器廃絶に向けてようやく一歩踏み出した歴史的な瞬間でした。

しかし、翌５月には、国連安全保障理事会の決議に違反して、北朝鮮が２回目の核実験を強行しました。世界が核抑止力に頼り、核兵器が存在するかぎり、こうした危険な国家やテロリストが現れる可能性はなくなりません。北朝鮮の核兵器を国際社会は断固として廃棄させるとともに、核保有５カ国は、自らの核兵器の削減も進めるべきです。アメリカとロシアはもちろん、イギリス、フランス、中国も、核不拡散条約（NPT）の核軍縮の責務を誠実に果たすべきです。

さらに徹底して廃絶を進めるために、昨年、潘基文国連事務総長が積極的な協議を訴えた「核兵器禁止条約」（NWC）への取り組みを求めます。インドやパキスタン、北朝鮮はもちろん、核兵器を保有するといわれるイスラエルや、核開発疑惑のイランにも参加を求め、核兵器を完全に廃棄させるのです。

日本政府はプラハ演説を支持し、被爆国として、国際社会を導く役割を果たさなければなりません。また、憲法の不戦と平和の理念を国際社会に広げ、非核三原則をゆるぎない立場とするための法制化と、北朝鮮を組み込んだ「北東アジア非核兵器地帯」の実現の方策に着手すべきです。

オバマ大統領、メドベージェフ・ロシア大統領、ブラウン・イギリス首相、サルコジ・フランス大統領、胡錦濤・中国国家主席、さらに、シン・インド首相、ザルダリ・パキスタン大統領、金正日・北朝鮮総書記、ネタニヤフ・イスラエル首相、アフマディネジャド・イラン大統領、そしてすべての世界の指導者に呼びかけます。

被爆地・長崎へ来てください。

原爆資料館を訪れ、今も多くの遺骨が埋もれている被爆の跡地に立ってみてください。1945年８月９日11時２分の長崎。強力な放射線と、数千度もの熱線と、猛烈な爆風で破壊され、凄まじい炎に焼き尽くされた廃墟の静寂。７万４千人の死者の沈黙の叫び。７万５千人もの負傷者の呻き。犠牲者の無念の思いに、だれもが心ふるえるでしょう。

かろうじて生き残った被爆者にも、みなさんは出会うはずです。高齢となった今も、放射線の後障害に苦しみながら、自らの経験を語り伝えようとする彼らの声を聞くでしょう。被爆の経験は共有できなくても、核兵器廃絶を目指す意識は共有できると信じて活動する若い世代の熱意にも心うごかされることでしょう。

今、長崎では「平和市長会議」を開催しています。来年２月には国内外のNGOが集まり、「核兵器廃絶―地球市民集会ナガサキ」も開催します。来年の核不拡散条約再検討会議に向けて、市民とNGOと都市が結束を強めていこうとしています。

長崎市民は、オバマ大統領に、被爆地・長崎の訪問を求める署名活動に取り組んでいます。歴史をつくる主役は、私たちひとりひとりです。指導者や政府だけに任せておいてはいけません。

世界のみなさん、今こそ、それぞれの場所で、それぞれの暮らしの中で、プラハ演説への支持を表明する取り組みを始め、「核兵器のない世界」への道を共に歩んでいこうではありませんか。

原子爆弾が投下されて64年の歳月が流れました。被爆者は高齢化しています。被爆者救済の立場から、実態に即した援護を急ぐように、あらためて日本政府に要望します。

原子爆弾で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りし、核兵器廃絶のための努力を誓い、ここに宣言します。

2009年（平成21年）８月９日

長崎市長　田上　富久

アジア青年平和交流事業と海外原爆展を開催

２００５年の被爆60周年を契機に追悼平和祈念館が国の機関として初めて海外における原爆展を実施してから今回で５回目を迎えますが、今回はアジア地域では初めてとなるマレーシアの首都・クアラルンプールで開催しました。

この原爆展の会場は写真や文章で被爆の実相を説明する40枚のパネルと20点の被災資料の展示コーナーや長崎・広島の惨状を映像で伝えるビデオコーナー、そして来場者に平和の気持ちを形として残してもらうための折り鶴コーナー、平和へのメッセージコーナーで構成されています。

海外原爆展の開催においてもっとも苦労するのは開催地の選定です。核兵器を保有している国での開催を優先していますが、たとえば第二次世界大戦で激戦地となったスペインのゲルニカ（07年）やベルギーのアントワープ（08年）など戦争や核兵器がもたらす惨状を思い起こし、平和の尊さを市民の方々に再考していただくために重要であると考え、実施してきました。

今回は追悼平和祈念館の運営を受託する平和推進協会が実施してきたアジア青年平和交流事業により4年前から交流を続け、信頼関係を築いてきたことからマレーシアの最高学府である国立マラヤ大学にて今年度の同事業と一緒に開催することが決まりました。昨年まで学科長としてマラヤ大学の学生を日本に派遣し、また日本から派遣された青年たちを受け入れてきた東アジア研究学科のナスルディン准教授を中心として実行委員会を立ち上げられ、大学内にある「アジア美術博物館」を全面的に改装、アジズ博物館長の協力のもと、大勢のスタッフが一丸となって展示会場を作り上げてくれました。

ナスルディン准教授

これまでの海外原爆展は平和をテーマにした一般の博物館で開催されることが多く、大学内での開催は初めてですが、現地の学生とともに、アジア青年平和交流事業で長崎から派遣された青年たちが資料の展示や開会式の補助、また長崎の被爆者として開会式において被爆体験講話を行った継承部会の渡邉司さんのお世話などを一生懸命に行い、スムーズに開会式を迎えることができました。

開会式当日にはマラヤ大学の招待客のほか、防衛大学の学生たちも多数来場し、１５０席を用意した会場は瞬く間に満員となりました。

祝辞を述べる
マラヤ大学副学長

講話者の渡邉司さんはこれまでに二〇〇回を超える一人芝居による被爆劇を長崎市内各所で開催しており、講話とは一味違った表現で被爆の実相を伝えています。今回の講話でも実際にのどが腫れて息ができなかった様子など描写を細部まで表現しており、現

地の学生からは渡邉さんの講話は、原爆の惨状がしっかりと伝わり、非常に心に残ったなどの感想が聞かれました。

なお、開会式においては在マレーシア日本国大使館の堀江大使にもご挨拶をいただきました。

展示をご覧になる堀江大使

一方、アジア青年平和交流事業では、海外原爆展開会式の翌日に長崎から派遣された青年たちが韓国から参加した学生たちや現地マレーシアの学生たちと平和をテーマにしたシンポジウムを行いました。

このシンポジウムでは韓国の学生たちが長崎・広島の原爆被害について研究した内容を発表し、現地マラヤ大学の学生は北朝鮮の核開発問題や中国の核武装問題について発表しました。

日本の青年たちはそれぞれが所属している大学や自分自身の活動について紹介し、平和活動を広く進めていくうえでアジアの若者同士の交流を通して情報交換することの必要性を述べました。

研究発表をする韓国の学生

5日目から日本の青年たちはホームステイで、現地マレーシアの一般家庭に滞在して交流を深めました。ちょうどマレーシアではイスラム教の断食（ラマダン）に入るということで地区の特別なお祈りの集会に参加することもできました。集会では日本からの訪問者のために、コーランの朗読や子供たちによる歌の発表などで歓迎してくれました。

このようにシンポジウムを通じてお互いの異なる考え方を理解しあったり、地域住民との交流を通じてアジア各国との連携を深めたりすることにより平和を構築していくことは非常に重要なことであると改めて認識することとなりました。

また、アジアの青年たちと平和について交流を深めていくためにこれまでアジア青年平和交流事業に参加した長崎の青年たちが中心となって昨年「アジアピースネットワーク」という団体が結成されましたが、今回の交流を機にマラヤ大学東アジア研究学科に「アジアピースネットワークマレーシア支部」が発足することが決まりました。インターネットで平和活動について互いに報告するなどアジア各国の青年たちがこれまで以上に親密な交流を積み重ねていくことが期待されます。

現地の人たちとの交流

マレーシア原爆写真展に参加して

渡邉　司

堀江日本大使・内田館長・マラヤ大副学長の開会式での話で、参加者の気持ちに核廃絶への高まりを感じた。そんな中で、私の講話が始まった。通訳されている間、参加者の反応を見ていると、真剣に聞き入り、うなずいている姿等で安心して話を進めることができた。

終了と同時に、涙している防衛大生の前で、指導官から「ノーモア・ウォー」と握手を求められた時は感動した。

午後から、高校生2、30名への講話では、熱心に聞き入る態度は、日本での中高生以上の真剣さを感じた。終了してからは全員が競って質問し、親しみを込めて話しかけてくる態度は超好感だった。

5回の講話を通じ、私の被爆体験を、大変よく聞いてもらえた事、理解してもらえた嬉しさは、これからの活動への自信となり、尚一層使命感を持って命ある限り国内外へ語り続けようと決意を新たにした。

この写真展で、マラヤ大学日本語学科の皆さんの優しさと思いやりで、楽しく活動できたことに心からお礼を言いたい。

アジア青年平和交流事業に参加した青年がマレーシアで感じたこと、考えたことを文章で寄せてくれましたので紹介します。

中村　芙美

今回のアジア青年交流事業は、海外原爆展との同時開催もあり、渡邉さんのご講話を聴講させていただきました。その中で、外国の方々の考えを知る機会があり、それぞれの人々がどのように核廃絶や平和に取り組んでいくことが可能なのか、糸口を見出す機会を与えていただいたように思います。

長崎で生まれ育ち、平和や核兵器(廃絶)という言葉は日常生活の中でもよく耳にしていましたし、自分の生い立ちから興味を持ったことで、大学での研究テーマも自ずと平和に基づくものを選んでいました。しかしながら、私が日常から感じていた平和へのアプローチと、大学で勉強するそれとは多少のズレを感じており、やはり市民レベルと学問レベルとでは視点が違い、平和学の分野において、私の生い立ちが優位性を持つことは難しいのか、と思っていました。

今回の事業では、先に抱いていた懸念を少し払拭することができました。マラヤ大学の学生や韓国の学生、そして私たち長崎の学生と3つの視点からのプレゼンがありました。互いの視点は違えども、平和への積極的な姿勢を目の当たりにし、この思いがより多くの人に派生していくような取り組みをしていきたい、と強く感じました。その後、「核廃絶に関して何ができるか」をテーマにアイディアを出しあいました。やはり、コミュニケーションがキーワードとなりました。

私たちが行ったプレゼンの中に、平和という同じコンセプトの下で、小さな動きを集約して大きな流れにすることが大事だという結論を提示したのですが、討論の中で出たアイディアも、その結論を起点としたものでした。物理的に離れていても、同じ日に同じ動きを行うことで、社会的・国際的に平和を訴えることも可能ではないか、と強く感じました。

平和は、ただ願っているだけでは実現しないものではないでしょうか。64年を費やし長崎市民が抱いてきた平和への思いを、私たちアジアの青年から世界の青年へと共有してゆくことが、求められていることだと、実感しました。

中島　幹太

今年で7回目となるアジア青年平和交流事業に今回参加できたことで、現地マレーシアで核廃絶に向けた若者の動向を目にすることができました。

第一に、今回の交流事業は初のマレーシアにおける原爆展と同時開催されたことで、原爆展に来られた現地マレーシアの人々の平和に対する意識の高さを目の当たりにしました。特に、高校生が被爆者の渡邉司氏の講話に熱心に聞き入り、講話に対する質問の多さには驚かされました。また私自身にとっても原爆展の準備において、マラヤ大学の学生達とパネルを前にし、現在の世界の核の情勢、オバマ大統領のプラハ演説以降の動きなどについて、自然と語り合えたことは印象的でした。

第二に、今回の参加した主たる目的である、「アジアの若者として平和構築のため何ができるか」をテーマに、韓国、マレーシアの学生と議論したことで、相互理解を深めることができたことです。韓国、マレーシアの学生とはその各国の歴史の違いからくる平和に対する考え方の相違はありましたが、核兵器廃絶に向けた強い意識があることは、共通のものでした。我々、長崎を代表とする学生のプレゼンのテーマであった、「核廃絶に向けた大きな流れを作るためのネットワーク作り」の結果が、多方面のご支援もあり、アジアピースネットワークのマレーシア支部の正式な発足として現れたことも大きな喜びでした。

このように、今回のアジア青年平和交流事業に参加することによって、アジアの若者の平和に関する意見を交換することができ、また核廃絶に向けたアジアの若者同士のネットワーク作りが進んだことは、大きな一歩であると感じています。この流れを止めないためにも、各個人の草の根活動はさることながら、アジアから核廃絶に向けた情報発信ができるよう、ネットワークの強化に向けた具体的な活動に、貢献できたらと考えております。

遠隔地にも生の声を

～長崎と各地を結ぶピースネット～

平成16年から実施しているピースネット事業も今年度で6年目に入りました。

遠隔地の児童や生徒にとって、インターネットを通じて被爆者本人から被爆体験を聴き、直接質問をすることができるピースネットは平和を考えるとても貴重な機会になっています。

原爆や戦争を体験した世代の高齢化が進み、その体験を次の世代に継承することが求められるなか、ピースネットの重要性は以前にも増して高まっており、また、この事業が広く知られるようになったことから最近では各地からの申込件数も増加傾向にあります。

原爆投下から64年が経過した今年の夏のピースネットの活動のもようをご紹介します。

長崎⇄広島

青少年国際平和未来会議ヒロシマ2009

この『青少年国際平和未来会議ヒロシマ2009』は、広島市教育委員会青少年育成部が主催しており、広島市の姉妹・友好都市などの青少年と広島市の青少年が広島に集い、15日間を共に過ごしながら世界平和の実現に向けた取り組みについて話し合うものです。

さまざまなプログラムがあるなか、8月11日には長崎追悼平和祈念館と広島平和記念資料館をテレビ会議システムで結んだフォーラムが開催されました。このフォーラムには横瀬昭幸長崎平和推進協会理事長やスティーブン・リーパー広島平和文化センター理事長が参加し、青少年たちに核兵器廃絶と世界恒久平和への実現に対する意志を伝えました。

長崎⇄札幌

札幌市平和・子どものつどい

札幌市では8月を「平和月間」としてさまざまなイベントを行っています。長崎からは8月12日に今年で2回目となる同市教育委員会主催の『札幌市平和・子どものつどい』に昨年と同じくピースネットを通して参加しました。

継承部会交流班の恒成正敏さんが札幌市役所のロビーに集まった約100名の札幌市代表の児童や生徒たち、一般市民の方々に向けて長崎追悼平和祈念館から被爆体験を語ったあと、札幌市代表の児童・生徒たちも自分たちが勉強してきたことを発表し、恒成さんと活発に意見を交わしました。会場には多くの報道陣が取材に訪れ、NHKでは全国ニュースとして取り上げられました。

長崎⇄山形

山形市立金井小学校

7月16～17日の2日間にわたり、4回に分けて山形市立金井小学校6年生を対象に実施したピースネットは国内で通算65回目となるピースネットとなりました。

金井小学校の児童たちは被爆体験講話を行った継承部会交流班の丸田和男さん、和田耕一さん、恒成正敏さん、松添博さんの話に熱心なようすで耳を傾け、質疑応答も活発に行われました。

また、このピースネットを開催したあと、山形県をはじめとする東北地方全域では、NHK山形放送局が長崎と山形の両方で今回のピースネットのもようを取材して制作したドキュメンタリー番組が放送されました。

TOPICS! へいわトピックス

市民のつどいを開催します

国連軍縮週間に合わせて「市民のつどい」を開催します。どなたでも気軽に参加できて楽しめるイベントで、子ども向けのコーナーもありますので、みなさんお誘い合わせのうえ、ぜひ会場にお越しください。

屋外イベント

戦時中の食糧事情を学べる戦時食の試食や原爆被災写真展、平和のメッセージを書いて空に放す環境にやさしい紙風船や平和の願いを込める折り鶴などのほか、わたがし・ポップコーンのチャリティーコーナーもあります。

日　時　10月24日(土) 10時～13時ごろ
場　所　原爆資料館前階段下広場

新しい会員を迎えました！

継承部会に新たに入会された方々をご紹介します。被爆体験講話をはじめとした今後の活躍が期待されます。

計屋　道夫さん（被爆当時８歳）
爆心地より3.8kmの自宅で被爆。
原爆落下当日、友達と浦上で会う約束をしながら、行けなかった。友達は行方知れずとなり、いまだにその果たせなかった約束の負い目をもつ。

中川　知昭さん（被爆当時９歳）
爆心地より3.3kmの自宅で被爆。
長崎大学病院で爆死した父の状況を確認しに母と浦上地区に向かい、原子野の惨状を目撃する。この悲惨さを被爆者として語り継ぎたい。

健康講話のお知らせ

わかりやすくてためになるとご好評いただいている健康講話の６回目以降のテーマが決まりました。いずれも追悼平和祈念館研究室で15時から開催されます。

第６回　11月19日(木)
自分の体とどのように付き合っていますか?
第７回　12月17日(木)
寿命革命－人生100年です－
第８回　１月21日(木)
ケガをした時の対処方法
第９回　２月18日(木)
病気の早期発見－健康診断を受けましょう－
第10回　３月18日(木)
意外と身近な甲状腺疾患

碑めぐりに参加しませんか？

継承部会碑巡り班及び平和案内人による被爆遺構・慰霊碑巡りを開催します。事前の申し込みは不要ですので、参加希望の方は歩きやすい服装で当日９時50分に爆心地公園に集合してください。

日　時　10月18日(日) 10時～12時
※小雨決行
コース　福田須磨子詩碑（爆心地公園）→長崎市立商業学校防空壕跡（油木町）→長崎市立商業学校の堤→油木町防空壕跡→下大橋付近の惨状様子・実態→大橋電停付近（解散）
参加費　無料

会員数報告

平成21年9月9日現在

◎維持会員　1、238名
◎賛助会員　171名
◎学生会員　14名
◎臨時会員　10名

寄付者紹介

ありがとうございます

◎白鳥　純子　一万円
◎大村　昭　三千円
◎川上　正徳　一万円
◎柴田　夏乃　一万円
◎大村市競艇企業局　十四万三千六百三十一円
◎三宅　レイ子　五千円
◎匿名　六千円
◎匿名　千円
（敬称略）

10月のイベントでシャッターチャンスを狙おう！

協会設立 25 周年記念
平和写真コンテスト
作品大募集中！

本紙は再生紙を使用しています。
平成二十一年九月三十日発行
印刷　株式会社　昭和堂